名戸ヶ谷ビオトープだより

第46号　2011年夏号　名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

http://nadogaya-biotope.org/index.html　発行責任者：　篠崎　将　Tel/Fax: 04-7173-6353

今年の田植え風景

その1　名戸ヶ谷小学校生徒と(5／6)

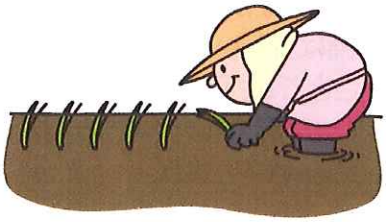
ビオトープの田んぼは泥が深い。足を引き抜くのが大変だ。

地下足袋を履くのが望ましいが、なかなか、そこまでの準備は難しい。素足は不安ということで靴下で入る子どもが多いが、靴下は泥の中に持って行かれてしまう。

その2　当会の田植え
（準備と本作業
5／14）

地ならしから始まる

準備作業



田植え本作業

休憩

春の生きもの観察会

晴れ上がって爽やかな5月14日、ビオトープのビッグイベントである、うるち田の田植えと生きもの観察会が今回同時に行なわれました。名戸ヶ谷小には前もって通知済みで1年から4年生までの児童13名、父兄1名と大変大勢の方に参加頂きました。

朝10時に説明を聞いて、早速子供達は手に網を持ちBゾーンの木道を駆け回り、アメリカザリガニ、カダヤシ、ウシガエルやアカガエルのおたまじゃくし、スジエビ、カナヘビなどをつかまえて来ました。又松清さんが捕まえたドジョウもあり見入っていました。
終わった後、松清さんからそれぞれ生物の詳しい説明を児童たちは熱心に聞いていました。

目の前には田植えをしているおじさん、おばさん達がいて、この珍しい風景を眺めながらわずか1時間半でしたが、楽しく自然に触れ良い思い出となった事と思います。

生きもの担当　藤平

かしわのホットスポットめぐり

増尾城址公園

増尾城址公園は、城跡が残っている昔からの公園区域と、近年新しく作られた北部の林と湿地を含む区域から成っています。

増尾城址公園には緑濃い林が見られます。林の一部は植栽されたスギなどの針葉樹に変わっていますが、昔からの樹木が多く残されています。この地の先住人だったと思われるシラカシやスダジイなどの常緑樹が大木のまま残っていて、その中にモミの巨木も見られます。また、イヌシデやコナラなどの明るい落葉樹も混じっています。その中には、比較的珍しい樹木ーヤマハンノキ、アオハダーを見ることが出来ます。

公園としての整備や手入れが行われてきたこともあって、林の下は低木も少なく明るい林下になっています。そうした環境が、昔からの貴重な草花を今日にまで育んできたと思われます。

ギンラン

オオバノトンボソウ

イチヤクソウ

常緑樹に落葉樹が入り混じるエリアではラン類やイチヤクソウが見られます。シュンランに始まり、キンラン、ギンラン、ササバギンラン、コクラン、オオバノトンボソウ、イチヤクソウと続きます。

増尾城址公園には多くの市民が散歩に訪れますが、その足元にこのようなラン類が咲いている様はかけがえのない風景です。この素晴らしい自然とのふれあいを壊さずに未来に残したいものです。ご覧になる際は、踏みつけに注意して、大切にしてください。

チゴユリ

ホタルブクロ

オトコエシ

北部地区のスギなどに置き換えられた場所では、明るい場所に育つ草花が残っています。

春はタチツボスミレ、ジュウニヒトエ、チゴユリ、フタリシズカ、夏はホタルブクロ、オトギリソウ、ヤマユリ、ミズタマソウ、秋にはオトコエシ、ナギナタコウジュ、などです。これらの花は園内の通路脇に咲いていますので、手にとって眺めることが出来ます。でも、決して摘み取らないよう、お願いします。

最後に湿地を見てみましょう。かつてはのどかな湿地でしたが、公園化によって大きくその姿を変えました。その中で、唯一以前の面影を留めている場所があります。台地近くの一画にあるハンノキ林です。ハンノキは湿地に生える樹木で、ここでは十数本のハンノキが湿地の中に林立しています。湿地に咲く草花としては、春のアリアケスミレ、初夏のカワヂシャ、夏のサンカクイ、マツカサススキ、秋のアカバナ、カントウヨメナが見られます。

（文・写真　佐々木光正）

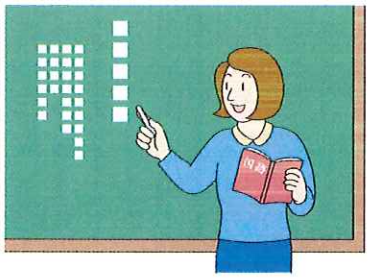
悼む

青野厚子さん

青野さんとの出会いは6年ほど前、私が退職して環境問題の勉強をし始めた頃でした。今年2月20日にはお会いして、ビオトープの会費をいただいたばかり。乳がん再発・転移とお聞きして驚いたものの、まさかその後2ヶ月で天国へ旅立たれようとは!

退職したらビオトープで活動しますと明るい笑顔で話された言葉が思い出されます。現役の英語の先生で50歳という若さでした。自分の言葉にはいつも行動が伴う優しい人でした。

（春山房子）



ヘイケボタル幼虫の放流

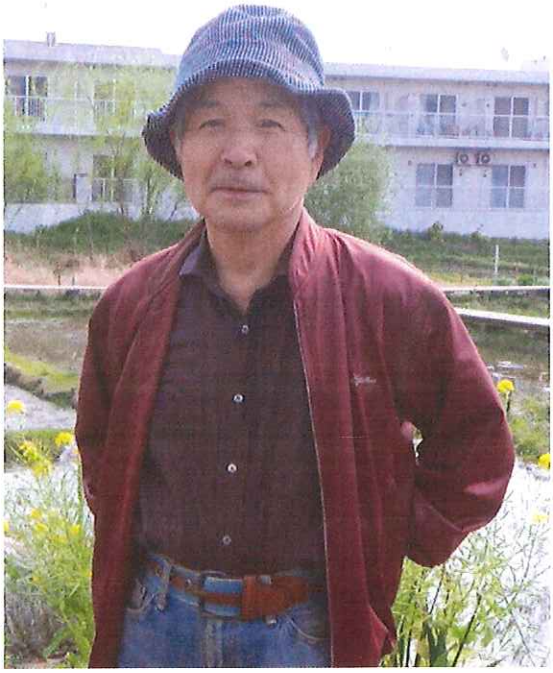
4月16日(土)、晴れて初夏並みの気候となり爽やかな一日でした。ビオトープの定例作業日でもあり16名と多くの会員参加がありました。最初にホタル放流、そして田んぼの草取り、肥料散布の作業へと続きました。一般の家族連れ3名も見学して、9時からヘイケボタル幼虫約70匹を放流しました。場所はBゾーンのホタル用水路と今回新しく南側の水路(柏市管理地)です。この水路は、水草も茂っていて生息地として期待されている所です。

昨年12月18日に松清さんから分けて頂いたもので、篠崎さん、村川さん、小笠原さん、そして小生と4人で飼育に励みました。昨年と比べ飼育しているなかで、大きさがバラバラで、かつ原因不明で少なくなっていき他の人も同様でした。昨年と同じようにやっていて生きもの飼育の難しさを感じます。前年は3月20日に放流していて、今年は寒さ等から約1ヶ月程遅くなりました。餌のサカマキガイも一緒にまいて、これから順調に成長し、7月上旬に又あのほのかな光りを見せてくれることを願っています。

生きもの担当　藤平三郎

写真右上は事前の水路開削作業。右下は今年から実施したフェンス内水路への放流。左上、左下は例年通りの水路への放流

ビオトープとわたし　伊藤　武夫



ビオトープの諸々の活動に余り出席率の良くない私に、この記事を書けとの依頼が廻ってきたのは、もっと積極的に活動せよとの一つの勧告なのか、とも受け取っています。

さて、それはさておき、私は2006年の春、吟詠仲間の園田さんに誘われ、ビオトープを初めて訪れて見聞させてもらいました。確か定例作業日で皆さんがそれぞれの作業をしている傍らで、木道に沿って独り田や水辺のあちこちを廻り歩いたことを憶えております。その時始めてニホンアカガエルの卵塊を見ました。親蛙は産卵後又冬眠に戻るとの説明を聞き、なんと面白い生態の粋な蛙もいるものかなと感心し、自然の妙というものに感動したものです。その時の感動が、即刻私を入会に導きました。

私は東京都八王子市に生まれ育ちました。当時の八王子市は人口10万ほどの小さな地方都市で、ちょっと郊外に出れば田畑や自然の緑が延々と続いていました。少年の頃の私は、それこそ毎日のように悪友達と連れ立って郊外に出て遊び歩いたものです。魚取り、トンボやバッタ・蝉取りから始まる昆虫採集、鳥追い、蛍狩り、栗拾い、山歩き、等々、それは飽きもせず、自然の中でよく遊び育ちました。また母の実家が八王子郊外（現・多摩ニュータウン）で農業をしていたので、四季折々の農事も、母に連れられて幼児の時からよく見てきたものです。

古希を過ぎて、今、このビオトープにて、遠い少年時代に感じ・味わった懐かしい何かを感じる時が多々あります。水のにおい、土の匂い、草の息吹、とりどりの草花、葦をなびかせる風、小動物の微妙な動き、鳥達の羽ばたき、農機具・作業着の匂い、藁束の匂い、それらの総てが醸し出す、とても快い、何かが、ある種の空気が、ビオトープにはあります。それは郷愁という感情がもたらすものなのでしょうか。

出来うるものならば、ビオトープを育む会の活動の中で、そんな空気を、より鮮明にとらえ、私の趣味の一つである絵画の中に、それを表現してみたいと思う今日この頃です。

作業日誌から　6.18　草とたたかう

鳥の色

今回からまた、生きものについて書くことになりました。過去にはビオトープで観察される個々の生きものについて紹介して来ましたので、今回はビオトープの生きものを中心とした生きもの全般について、別の視点から書いてみようと思います。初回は「鳥の色」です。

鳥は種類によって、いろいろな色や模様がありますが、嘴と脚を別にすると多くの鳥は羽毛の色によって作られています。鳥の色や模様は、同じ種類でも雄雌や若鳥と成鳥、季節によっても色が変ります。　例えばビオトープでよく観察される　ハクセキレイの雄雌は夏と冬で背の色が異なり、更に幼鳥、若鳥、成鳥と色も模様も変わります。 また、婚姻色（又は生殖羽）と言い、発情期になると雄が雌の興味を引くため、美しい羽色に変わる鳥もいます。トキなどはその例です。スズメなど小鳥類は、幼鳥で雄雌の差が無いものが多く、屋外で区別するのは難しい鳥です。

羽根の色や模様が変わるのは、定期的に羽根が抜け変わる「換羽」という現象があるからです。殆どの鳥は少なくとも、年に1回全身の羽根が抜け変わります。（大型の鳥では数年かかるものもある）ハクセキレイの成鳥の場合は繁殖直後に全身換羽して　　冬羽根になり、春には再び胸や頭の一部が換羽して、夏羽になります。　カルガモの雄は繁殖期後に全身換羽し、雌に似た地味な羽色に変わりますが、冬になると翼や尾を除く羽が換羽し、日本でみられるお馴染みの美しい羽色になります。

最初に鳥の色は羽毛の色によって作られると書きましたが、例外があります。ビオトープでも度々観察されているカワセミです。カワセミは鳥の宝石とも言われる美しい鳥ですが、輝くような青い色は構造色、つまり幻の色であって青い色素に基づいた「青い鳥」というのは存在しないそうです。羽枝の複雑で微細な構造の層に、光が反射や屈折をして人の目に青い色として映っているのです。従って見る角度によって、緑や青に見えるのもこのためです。この説は山階鳥研の研究員で、元天皇家の長女であった紀宮さんが電子顕微鏡で調べて発表されたもので「鳥の雑学事典」（山階鳥類研究所　著）に述べられています。

（文 写真：篠崎　将）

編集後記

この夏号は、本来であれば6月の末頃、田植えを中心に発行する予定を立てていました。ところが、膀胱にガンがあるということで、この摘出手術を受けることになり、5月連休あけに入院して、退院したのが6月中旬になってしまいました。この手術はかなり大変なもので、8時間、輸血1600CCというものでした。さらにおまけで、腹中にウミが溜まるということで、再度、全身麻酔で切開して、これを取り除く手術を受け、体はすっかりがたがたになりました。まあ、このあたりは、いずれ闘病記としてまとめたいと考えています。

入院が長引きそうだということで、発行時期をずらすということで、ご理解はいただきました。また、メールなどで激励をいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

退院したといっても、肉体的なリハビリが必要ですし、なかなか気力もでてきません。編集作業に入って、愕然としたことは、写真は佐々木さんからきちんと送られてきているのですが、田植え関係の原稿がないことに気がつきました。本来、自分が参加していれば、なんとか説明もつくのですが、それもかなわないので、単に写真を並べるだけに割り切りました。かなり異例のビオトープだよりになりましたが、ご理解いただきたくお願いします。

（高田昭治）